Rd. 7

SEP 2012

Japan RACING PRESS

2012 AUTOBACS SUPER GT ROUND 7
KYUSYU GT 300Km RACE

SUPER GT

2012 Round 7
AUTO POLIS

Editor
吉川綱恵

Photo
鉄谷康博
加藤公丸

Special Text
中村佳史
島村元子
近江　勲

AUTO POLIS GT 300Km RACE
9/29–30

スーパーGT第7戦は舞台を九州に移し大分県のオートポリスサーキットで開催された。予選、決勝共に台風の接近であいにくの天候の中で行われた。今回を含む残り2戦の終盤戦となりシリーズポイント争そいもさらに激しくなった。

ファイナルラップの攻防は S Road MOLA GT-Rに勝利の女神

GT-Rが3連勝、MOLA GT-Rは2勝目

2年連続　柳田／クインタレッリ組はシリーズチャンピオンに輝く

予選は今年の3月に創立以来のコース全面改修が行われコースレコードタイムが期待されたが、あいにくのウェットコンディションでのアタックとなった。今回はノックアウト方式ではQ1ではS RoadGT-RがQ2でもMOTUL　GT-Rがベストタイムを叩きだした。しかし最後のQ3ではウエッズスポーツのレクサスSC430がGT-R勢を抑ええ見事にポールポジションを獲得した。

決勝日の天候は台風が過ぎ去ったにも関らず小雨に加え濃霧。朝のフリー走行もキャンセルとなりレースの開催さえも危ぶまれ、昼ごろには濃霧による視界不良はなくなり決勝へとオンタイムで進行された。

決勝は終始小雨の中、誰もが予想をしていなっかた最終ラップでの攻防となった。予選Q2でタイヤの選択を誤りで敗退となったS Road GT-Rと小雨ウェットには強いダンロップタイヤ装着のEPSON　HSVが軽い接触を含む激しいバトルとなったがGT-Rのドライブする柳田真孝がHSVの中山友貴を第2ヘアピン後に決着。今季2勝目を見事にシリーズ優勝で決めた。

GT500

少ない雨量に強いGT500クラス唯一のDUNLOPタイヤ装着するEPSON　HSVはペナルティストップで最後尾まで後退したがタイヤ無交換作戦で終盤はトップに浮上。今季初優勝が見えたレースもファイナルラップの攻防に破れ惜しくも2位となった。

予選のQ3ではアンドレ・クートが見事なタイムアタックを見せポールポジションを獲得。決勝では第6戦に続く2戦連続の表彰台を獲得。初優勝まで後一歩に近づいた。

GT500 決勝結果

優勝	No.1	S Road REITO MOLA GT-R	柳田真孝／ロニー・クンタレッリ
2位	No.32	EPSON HSV-010	道上　龍／中山友貴
3位	No.19	WedsSport ADVAN SC430	荒　聖治／アンドレ・クート
4位	No.24	D'station ADVAN GT-R	安田裕信／ビヨン・ビルドハイム
5位	No.39	DENSO KOBELCO SC430	脇阪寿一／石浦宏明
6位	No.23	MOTUL AUTECH GT-R	本山　哲／ミハエル・クルム

Triple a Vantage GT3が今季2勝目

S-Road NDDP GT-Rが無念のタイヤ脱落

予選から絶好調の走りを見せQ1からQ3まで完璧な予選を戦ったのはS-Road GT-R。決勝でもウエットに強いS-Road GT-Rは残り7周で関口のドライブするリアタイヤが脱落。Triple a Vantage GT3が吉本大樹で逃げ切り今季2勝目を飾りポイント争いでも2番手に浮上した。

GT300

GT300 決勝結果

優勝	№66	triple a Vantage GT3	吉本大樹／星野一樹
2位	№911	ENDLESS TAISAN 911	峰尾恭輔／横溝直輝
3位	№33	HANKOOK PORSCHE	影山正美／藤井誠暢
4位	№61	SUBARU BRZ R&D SPORT	山野鉄也／佐々木孝太
5位	№0	GSR 初音ミクBMW	谷口信輝／片岡龍也
6位	№21	ZENT Audi R8 LMS	都筑晶裕／リチャード・ライアン

THE TEAM

CLOSE-UP

Team TEAM KONDO Racing

Text by M.Shimamura

Photo:Y.Tetsutani／K.Kato／Y.Nakamura

モータースポーツをより身近にした人物 今もなお、選手同様の高い人気を誇る監督

その昔、テレビで一世を風靡したハタチの若手アイドルが突然レースをするといったら? 周囲の目は興味に満ち溢れ、モータースポーツ業界においても何かとウワサが先行したり、いわゆる外野も相当ウルサかったはず。しかし、僅かな時間を作ってはサーキットに通い、レーシングカーのステアリングを握ってトレーニングを繰り返した。スポットライトを浴びることに慣れたアイドルにとって、実に地味な作業だったかもしれない。しかし、その積み重ねが力となり、いつか花を咲かせるということは、さらにシビアな芸能界に身を置く者としてもしかしたら、どの若手ドライバーよりも痛感していたのかもしれない。世間では「マッチ」と呼ばれていたその選手は、今や近藤真彦監督として、日本のモータースポーツ界においてなくはならない存在となっている。

ドライバーとしては、ワンメイクレースを皮切りに、88年から5年間は全日本F3に参戦、フル参戦を続け、レーシングドライバーとしてのキャリアを築いていった。さらに94年には、世界耐久レースの雄であるル・マン24時間レースにもチャレンジするなど、いつも意欲的にレース界にかかわってきた。転機は2000年。自らのレーシングチーム「KONDO Racing」を設立し、まずはフォーミュラ・ニッポンに参戦。このときは1台体制でチームオーナー、監督、ドライバーという3役をすべて担うというハードワークをこなした。さらに勢いは留まるところを知らず、2006年からはSUPER GTへの参戦を表明。一時フォーミュラへの参戦を休止していた時期もあるが、2010年のシーズン途中から復帰を果たし、現在に至っている。

レースでは若手育成にもかかわりつつ、SUPER GTにおいては長らくヨコハマタイヤ(ADVAN)とのパートナーシップを続けており、チームとしてタイヤ開発にも関わる。GTでは2007年のマレーシア戦でチーム初優勝を果たすと、翌年もマレーシア戦を勝利し、V2を達成する。さらには、フォーミュラ・ニッポンでも第7戦富士でチーム初優勝を果たすなど、大きく飛躍を続けている。

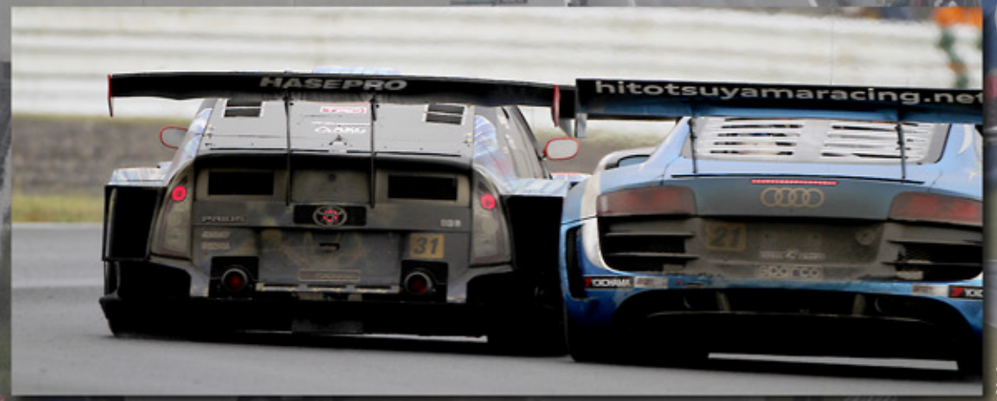
サーキットでの人気は依然として高く、ピットウォークはモチロン、パドックにはいつも大勢のファンが"待機"しているほどだ。今シーズンは未勝利だが、最終戦に向けて虎視眈々とそのチャンスを狙っているのは言うまでもない。

ビヨン・ビルドハイム選手
安田裕信選手

J PRESS TOPICS

52号車ベンツSLSがクラッシュ。SCが導入された。

タイヤ無交換作戦にでた24号車近藤レーシングはバトルの末、19号車ウエッズスポーツSC430に捕らえられ惜しくも表彰台を逃した。



小雨の中31号車プリウスと21号車Audiとの激しいバトル。

34周目にピットイン。星野から吉本大樹に交代。このピットインで2位に後退し、再びS Roadがトップに。